

「仮の宿に暮らしている私達」

2019年1月27日

マイクとジョンという二人の高齢の男性がいました。彼らはいつも町のカフェでコーヒーを一緒に飲み、色々なことを話すことを楽しみにしていました。彼らは若い時、マイクは三塁手として、ジョンはピッチャーとして地元の野球チームで活躍していたため、毎日のように野球の話をしていました。そんなある時、二人はこんな話をしました「天国にも野球チームはあるのだろうか」。

それから一年後、マイクはジョンより先に召されていきました。仲間を失ったジョンは悲しみの中を暮らしていました。そんなある晩、ジョンの夢の中にマイクがあらわれたのです。そして、ニコニコしながらジョンに言いました「ジョン、グッドニュースが一つ、そしてバッドニュースが一つある。グッドニュースは天国にも野球チームがあるということ、現に俺も今、そこで三塁手としてプレイしている。そして、バッドニュース、それは・・・、（マイク、遠慮せずに言ってくれよ）今週、金曜日の先発ピッチャーが発表されたのだけれど、お前が先発予定だ」。

時々、このように私達の会話の中に、ジョークの中に「天国」が見え隠れします。映画やドラマでも天国をテーマにしたものがあります。しかし、それはどこか、おとぎ話のようで、今いちピンときません。

しかし、聖書は確かに天国はありと言っています。ヘブル人への手紙11章13節－16節を読みましょう。

⑬これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを自ら言いあらわした。⑭そう言いあらわすことによって、彼らがふるさとを求めていることを示している。⑮もし、その出てきた所のことを考えていたなら、帰る機会があったであろう。⑯しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである。

この聖書箇所から今日は「仮りの宿に生きている私達」ということをお話ししたく願っています。

寄留者とは「仮の場所に住んでいる人」ということです。私は先週、池袋の安宿の一室にいました。スーツケースを一つだけ持って、そこにやってきました。その宿に四泊して帰ってきました。ですから、それは明らかに旅であり、私はしばし東京という町に寄留したのです。

同じように聖書は一つ所に80年住んでいても、私達は旅人であり、私達は仮りの場所に住んでいるのだと言います。そうです、少しばかりそこに留まる日数は多く、荷物も多いのですが、この地上での人生も借り宿なのです。

今、読みましたヘブル人への手紙11章13節は「これらの人は・・・」という言葉で始まっています。日本語の文法でこのような文がきました時は、当然、その文章の前に「これらの人」が描かれているのです。

この前の箇所に記されているヘブル11章13節の前には7人の名前が挙げられています。その人達の名前は「アベル、エノク、ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、サラ」です。そして、これらの人たちにおそらく共通していたことは、彼らのほとんどが、自分の生まれ育った場所、すなわち故郷を離れて生きた人たちでありました。

そして、これらの人達は皆、自分達の故郷はこの世のものではなく、それは天にある故郷だということを知っていたということなのです。

詩篇39篇4節-7節を読んでみましょう

「主よ、わが終りと、わが日の数のどれほどであるかを私に知らせ、わが命のいかにはかないかを知らせてください。見よ、あなたはわたしの日をつかのまとされました。わたしの一生はあなたの前では無にひとしいのです。まことに、すべての人はその盛んな時でも息にすぎません。まことに人は影のように、さまよいます。まことに彼らはむなしい事のために騒ぎまわるのです。彼は積みたくわえるけれども、誰がそれを収めるかを知りません。主よ、今わたしは何を待ち望みましょう。わたしの望みはあなたにあります」。

この詩篇を書いた人は言いました「神よ、私の命がいかにはかないかを教えてください。この私の一生は無に等しい、その人生の絶頂にあるような時でさえも、それは息にすぎないことを。それは影のようなもので、私たちは空しいことのために騒ぎまわり、私たちが汗水垂らして蓄えたものも、それが最終的に誰の手にわたるかも知らない者です」。

「はかない」「無」「息」「影」これらの言葉は何を意味しているのか。「はかない」とはあっけないということ。「無」とはそれこそ何もないこと。「息」とは一瞬になされるもので「影」とは少しの間そこにあるもので、すぐに消えてしまうものです。すなわち、これらのものは全て「つかの間」ということを現しています。私たちの人生ははかなく、無で、息で、影のようにつかの間のものだということです。

日本の歌に「ふるさと」という唱歌があります「うさぎ、追いし一かの山、小鮒釣りし、かの川一」。「ふるさと」を広辞苑で調べると、まず「自分が生まれた地」と書かれています。

多くの私たちの心からそのふるさとへの思いが消えることはありません。ふるさとの歌を聞くと、あっという間に私たちの心はあの町、この町へと飛んでいく。そこが田舎であるならば、田んぼの匂い、蝉の鳴き声を新緑の香り、川のせせらぎの音、私も今でもそれらを思い起こすことができます。

しかし、一つ残念なことがある。それは、多くのこれらのふるさとも変化をするということです。今、私たちが自分のふるさとに帰郷すると、ほとんどの場合、その町並みの変り様、そこに住む人たちの変化に気がつきません。

今、私自身、自分が置かれている状況を考える時にも思うことがあります。先週、私は母を訪ねましたが、この母もいつか主の元に帰っていく時がきますでしょう。そうしたら、おそらく私が母国、日本に行くことは少なくなるということです。私にとっての文字通り母国と呼んでいた意味が失われるからです。

これらのことを先ほどの七人はそのことに気がついていたのでしょうか。故に彼らはそのような故郷を思うのではなく「天にあるふるさとを恋い慕っていた」のです。そして、13節にあるように「はるかにそれを望み見て喜んだ」のです。そして、神ご自身が彼らのために都を用意されていたのです。

ローマ書を書いたパウロはその8章18節—25節においてこのような言葉を残しています

「18わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。19被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる。20なぜなら、被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させたかたによるのであり、21かつ、被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されているからである。22実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。23それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる。24わたしたちは、この望みによって救われているのである。しかし、目に見える望みは望みではない。なぜなら、現に見ている事を、どうして、なお望む人があろうか。25もし、わたしたちが見ないことを望むなら、わたしたちは忍耐して、それを待ち望むのである」。

ヘブル書に書かれている人たちは望んでいるものがありました。そして、このパウロも24節で言っています「わたしたちは、この望みによって救われている」。どの望みか、すなわちその前に彼が記しているように、私たちがやがて栄光の体に変えられること、神の子たる身分が授けられていること、すなわち、それは私達が天のふるさとにやがて帰るということであり、その望みによって救われているというのです。

海外に暮らす者が覚悟しなければならないこと、それはもう一度、あの祖国の土を踏む事ができないかもしれないということです。それは年齢に関係はなく、誰にも起りうることです。訪日してアメリカに帰る時に、空港ロビーで「これが最後の訪日になるかもな」と胸に詰まる思いで飛行機に搭乗なさった方がこの中にいるかもしれない。

しかし、私たちには天のふるさとが保証されています。地球上のふるさとを「仮のふるさと」と説明するなら、私たちの命の始まりを与えて下さった父なる神がおられる地を私たちは真のふるさとと呼ぶのです。

神学者でもあり、クリスチャン作家でもあったC S ルイスが書いた「ナルニア国物語」のシリーズを読んだことがある人がいるでしょうか。その最終章となります「ナルニア国物語・最後の戦い」はこの長い物語のクライマックスであるにもかかわらず、ありふれた「それで皆は幸せになりました」という終わり方をしていません。

「ナルニア国物語」のシリーズの中には、わくわくするような冒険や旅の様子が描かれています。そのシリーズの最後でルイスは「これから本当の物語が始まる」ことを告げています。

それまでのナルニア国の数々の冒険は「物語の表紙やタイトルページにすぎない」と言うのです。本当の第一章はようやくこれからスタートするというのです。そして、それらとは地上でまだ誰も読んだことのない物語であって、これから永遠に続くもので、一章先へ進むごとに、さらに素晴らしい話になる。と記されています。

すなわちルイスが言っていることは「えーここまで読んだ冒険物語は全部、本当に素晴らしい話の前書きでしかなかったの！こんなにおもしろい出来事が全部、これから始まるもっと素晴らしい話の予告だったなんて！」ということなのです。

主にある兄弟姉妹、私たちの真のふるさととは天にあるのです。私たちはこの望みに生きる者たちなのです。

天のお父様、御名を崇めます。今朝、私達に約束されている故郷について心を向けることが出来ましたことを感謝します。この色あせることのない、永遠のふるさとを目指して一日一日を大切に精一杯、生きていくことができますようにお導きください。主イエス・キリストの御名によりお祈りします。アーメン